

近代短歌に現われた子ども

(五)



大塚
雅彦

(9) 土岐善麿

土岐善麿といえ、若き日にローマ字の歌集を発行したり、三行書きの新表記の短歌で啄木に影響を与えたり、その晩年の啄木と交わり「樹木と果実」の発刊を共に計画したり、自らの生家の浅草・等光寺で啄木の葬式をしてやったり、また、最初の啄木全集の刊行に力をつくし、啄木を世に出した人物の一人として、忘れてならない存在であるが、明治十八年に宗門に生まれ、昭和五十五年四月に逝去するまで、実に九十五歳の長寿を保った。その間、八面六臂の活躍をし、「一芸万芸に通ず」るの感を与えた多力者であった。すなわち、短歌はもちろん、田安宗武（学位論文）や京極為兼等の研究

家としての国文学の業績、国語審議会々長の重責、新作家による能楽界への寄与、杜甫研究や日中交流運動の功績、エスベラントへの貢献等々、枚挙にいとまがない。私は近代短歌史はもちろん、近代文化史にのこる此の巨星の晩年を「生きている古典」というような思いでいつも眺めていた。残念ながらその全集は未だ出ていないが、全集を編むとすれば尨大なものになるであろう。著書だけでも百五十冊を越えるからである。

私は生前の土岐博士に何回かお逢いしたことがある。最初は日比谷図書館々長をして居られた頃で、同館内で逢った。いかにも若々しい風貌と、都会人らしいキビキビした話しぶりが印象的であった。また、私たち「平出修研究会」会員が『定本平出修集』（春秋社）を編纂刊行した際、朝日新聞社講堂で記念講演会を催したが、講師の一人として博士をお願いし、その折、楽屋でお話をきいた。歯切れのいい話術や、知的なスマートさが、さわやかだった。その後、博士に私淑する冷水茂太氏や中野菊夫氏らが企画者となって、博士を敬愛する人々が博

士の誕生日に集まってお話を聴く「周辺の会」というのが毎年催され、私も数回参加した。かなりの高齡であったのに、博士はいつも得意のジョークを連発して人々を笑わせ、後進に知的刺激を与え、いかにも自由人、都会的な知識人としての相貌をいつまでも見せていた。それは長い間、読売新聞社や朝日新聞社のジャーナリストをしていた経歴から身につけたものもあつたらうし、有名歌人なのに結社も持たず自主独往の歌人で終始した潔癖さや、常に新しいものや未知のものに挑む進歩的精神や、学問や芸術を深く愛するインテリジェンスの持主だったからであろう。私の私的回想をふくめて駄文を連ねたが、歌人としての幅の広さ学識の深さや清新さを常に持っていた点で近代歌人として珍らしいタイプであった点を、強調しなかったためである。その尨大な業績のうち、「メインを為すものはやはり短歌」（冷水茂太『斜面慕情』昭57・6）であろう。

①子をつれて、日ごとに遊ぶ停車場の広場の草も、黄ばみたるかな。

②なれの父のこの臆病に似るなけれ、このあきらめを
まぬること莫^なれ。

①は歌集『黄昏に』（明治45刊）所収。この歌集は三
行書きで、すべて一首の中に句読点を施している。この
歌は最初の「ソファの上」という小題のある部分の中に
ある。この頃善麿は哀果と号していたが、明治四十二年
二月、中村鷹子と恋愛結婚、十月に読売新聞記者となり、
下谷区北稻荷町に住んだ。翌四十三年六月に長女サチ子
が生れ、家が手ぜまになったので、十二月芝区浜松町一
丁目十五に家を建てて移った。ここは浜松町の駅から
四、五百メートルのところ、駅に近く、汽車が通ると家
はかすかに揺れた。鉄道をはさんで東側は、浜松町から
品川にかけてまだ海岸だった。「新聞記者の慌しい日々
の暮しの中で、わずかの時間に、長女をつれて駅までの
散歩をしたのであろう」（武川忠一『土岐善麿』昭55・
10）。「哀果は日ごとに大きくなってゆくはじめての女の
子が可愛いくてならなかった。毎日のように出勤前や勤
めから帰ってからのひとときを、その娘のサチ子を抱い

て、駅前の広場に、汽車を見せにでかけるのだった」

（冷水茂太『土岐善麿の歌』昭49・3）と、諸家の「鑑賞
する通りであろう。忙しく疲れる勤務の日々に、子供に
サービスする若い都会サラリーマンの生態は今も昔も変
らないが、この歌は同時に、そのような繁忙の中に身を
置く自らへの慰めと愛惜の思いもこもっていいよう。ま
た、明治末葉の頃の浜松町駅周辺を想わせて、味わい深
い。なお、この歌の後の方に「わが子と、拾ひては投ぐ
る十月の、こころしげき路の石かな。」「むすめよ。こ
の黄昏^{なごれ}の落葉^{らくえふ}を父は焚^たくべし。燐寸^{ほち}をもてこよ。」の如く
子どもと遊ぶ歌や、「夜おそく、家にかへれば、死ぬば
かり、子どもの泣けり。もの言はず、寝る。」「わがむす
め、やっと眠れば、家は、みな、爪先のみの、秋のゆふ
ぐれ。」の如く、よく泣く女兒を気づかい、足音をしのば
せていた若い著者と夫人の微笑ましい生活ぶりを偲ばせ
る作品がある。

②は自選歌集『土岐哀果集』（大正6年刊）に収めら
れているが、歌の製作は大正四年始である。やはり三行

書きで、句読点がある。この年、一月三日に長男健児が生れたが、三番目の子で始めての男子だったので、哀果の喜びは大きかった。「男子生る」の小題にもその歡喜が現われている。この歌の前に「健かなれ、——ただ健かにあるのみに、なんにもせざる父には似るな。」があり、併せて味わえる。生れた男児をただよろこぶだけでなく自己批判をふくめてこのように詠じているのは、「社会と自己、思想と感情、理論と実行などの間の矛盾にさらされている自分の姿」（武川忠一、前掲書）を見つめているからといえる。具体的にも、「前年の大正三年五月号の『生活と芸術』誌上で、哀果は仲間の大杉栄から、その社会主義者としての行動的臆病さを痛烈に批判されたことがあった……」ので、自らも知識書齋人的ソシアリストの弱さとして自認していることであった」（冷水、前掲書）ため、子どもにはもつと強くなつてはし、とねがいをおかけたのであろうという。この歌は前出した啄木の「その親にも親の親にも似るなかれ——かく汝が父は思へるぞ、子よ。」によく比較されて論じられる。なお前

掲『黄昏に』の中に「革命を友とかたりつ、妻と子にみやげを買ひて、家にかへりぬ」という歌が収められているが、この「友」とは石川啄木のことである。

③ そのひとみ親のすがたをはなたじとひた寄り仰ぐあはれ子らの眼

④ 子らはみな学校へゆき去りにけり家のまへなるわか葉の路を

③④共に歌集『緑の斜面』（大正13年刊）所収。③は有名な大正十二年九月一日の関東大震災の際の歌であり「地上」とする二百二十余首の震災関係作品の中の一首である。この歌の次に「背丈にしあまる布団をかいばさみより添ふ子らのうなじを抱く」という作もある。恐怖に脅えつつ必死の眼で親の姿を見失うまいと寄り仰ぐ子どもらの姿を、③はリアルに描いている。善磨はこの日、出勤途中で地震に遭遇し、社へかけつけた後、急いで家に戻った。火の手が迫ったので家族を連れて芝公園に避難したが、その夜、浜松町の彼の家は焼けたという。大震災をうたった歌人は少なくないが、善磨の大作

はクロニクル的なものとしても価値がある。『緑の斜面』の終りの方には、避難後、一時芝白金今里町に仮寓、更に下目黒に新居を構えて移り、ようやく平安を得て、明るい心も戻ったことを想わせる作品もある。④はその頃の作品で、「郊外新居」の小題のある一連の中の一首。「学校のかばん背におひて門田みち蛙つかまへゐる男の子なり」という歌もあり、その頃、下目黒辺もこんな風景の見られる郊外だったのである。

(10) 窪田空穂

空穂は本名通治、明治十年、歌人王国ともいべき信州に生まれた。松本市の近郊である（市内、和田区）。松本中学を経て東京専門学校（後の早大）卒。新聞記者や雑誌記者を経て、早大教授となり停年まで長く勤めた。昭和四十二年没、九十一歳。若き日に「文章」に短歌を投稿し、選者の与謝野鉄幹に認められ、新詩社々友となり、「明星」に短歌や詩を発表する。間もなく退社

し、明治三十八年「十月会」を結成、大正三年には歌誌「国民文学」を創刊した（この雑誌は今日まで続いている）。処女詩歌集『まひる野』（明治38）を始め、生涯に三十冊近い歌集をのこし、また歌論・歌話も多く、国文学者としての研究書、評釈書も少なくない。その全業績は計二十八巻・別冊一卷の龐大な全集（角川書店——昭和40—43）に収められている。その歌風は空穂調といわれる独自の風格を持ち、いわゆる境涯詠にユニークなものを樹立したが、晩年まで生命の深さをみつめる旺盛な創作力を示した作家であった。

① その子等に捕へられむと母が魂燈と成りて夜を來たるらし

② 米高く買ひはかぬなり我が子等は大河の辺に行きて水飲め

③ その母に生き写しなる女の童今は忘れて母を知らずとふ

④ 鳴く蟬を手握りもちてその頭をりを見つつ童走せ來る

⑤ 死ねる子を箱にをさめて親の名をねんごろに書きて
路に棄ててあり

⑥ 剃りかけの頭をしたる弟おとらへ児童こどもに添そひて巷に遊ぶ

①は歌集『土を眺めて』（大正7刊）所収。空穂は家族運が悪く、明治四十年に最初の妻藤野つげのと結婚し、章一郎（後の早大名誉教授、国文学者）、ふみ、なつ（乳児で死亡）の一男二女をあげたが、この妻は大正六年に僅か三十歳で死去した（後に亡妻の妹操と再婚して次男茂二郎を生むが、この後妻とは離婚する。なお、茂二郎は後にソ連で戦病死）。そんなわけで、最初の妻に死なれて困却した空穂は、九歳と四歳の長男長女を、しばらく信州の母方の祖父母に預け、東京でひとり暮らしをした。そんな折、妻の生家にこの二児を訪れた時の作品が①である。妻の実家は東筑摩郡島立村（現松本市）で空穂の郷里の隣村であるが、「高網と呼ばれる川がある。子供たちは独りで遊びに行くことは禁じられていて、何となし怖ろしい川にしていた。……父が東京から来て、大喜びの幼児たちは、夜も日も遊び相手にし、螢取りに

せがんで、この川の方面へいった」（窪田章一郎『窪田空穂』昭55・8）という。「母を亡くした子供たちのあわれさ、いとしさを深く胸に刻みつけている作者は、それ以上に亡き妻の魂は子供たちを思いやっているにちがいないと思っている。その痛切な心情がこういう歌をなさせた」（木俣修『近代短歌の鑑賞と批評』昭39・11）というべく、その亡妻の魂が螢となって闇を渡ってくるという発想はまことに絶妙で、心をうたれる。この時の歌にはなお「悲しまば母は歎かむまことに物所思はで遊びね我が児」「越えかぬる田川越さすと掻き抱き飛べば愛かなしき吾が子なるかも」等があり、父親としての作者の心情がにじんできている。ちなみに此の『土を眺めて』は長歌が多い歌集で、妻が臨終の床で愛児たちに無限の思いをのこして死んでゆく場面を描く「子等との別れ」の長歌の如きは、涙なくしては読み得ない。これ以後、空穂はさかんに長歌をつくるが、彼の長歌は近代歌人の中でも特に定評がある。

②は歌集『村むらの葉』（大正9刊）所収。「物価高し」と

題した五首連作中の一首。大正七年八月、米価が暴騰し全国に米騒動が起り、ストライキが続ぎ、失業者は激増するという事態に陥った。文筆生活者の作者も生計苦しく、高値の米を買いかねるような状況であった。この歌の下旬は思い切った表現で、作者のやりどころない悲憤を示しているが、この歌は、愛する子供たちにも充分に飯を食わしてやれないという作者のせつない愛情を録すると共に、当時の不安な世相を示したという歴史的価値もある。続いて「わが家は菓子買ひ難し今よりはわれも食はじ子らも堪へて居よ」という歌もある。

③は歌集『鏡葉』(大正15刊)所収。「子と語りて」と詞書のある五首のはじめの一首。大正十年作であるから、この「女の童」は当時数え年九歳になっていた長女ふみであろう。満四歳にも達していないうちに母を亡くした幼い娘が、その亡母に「生き写し」なのも哀れを誘うが、その娘と語り合っていると、母の記憶がずでになのがわかり、一層胸をつかれる、という歌であろう。

「この子ゆゑ命懸けにし母なりと我は知れれど子は知ら

ずけり」という歌が続いているが、命をかけて子を愛した母、その母を忘れてすくすくと育つ子、そして親子のそのような関係のことをいいようのない寂しさで思っている作者——まことに心境小説の一節は想起させるような味わい深い作品である。

④も同じく『鏡葉』所収。「盛夏のころに」中の一首。じいじい鳴く蟬をしっかりと手の中に握り持って走ってくる童児が、ときどき立ちどまって、その蟬の頭をのぞき込んでいる、という路上の所見である。緊張している子供の姿態が眼に見えるような巧みな描写で、しかもユニモアがにじんでいる微笑ましい作品だ。じりじりと照りつける夏、真黒い陽焼けの顔をしてランニングシャツ一枚か、あるいは裸で走ってくる腕白坊主、その手の中で必死に鳴いている蟬のけたましい声……それはわれわれ自身が少年の日に自らも経験した世界であり、読者はこの歌に幼き日の郷愁をよび起こされるのではあるまいか。

『鏡葉』にはまた⑤のような作品もある。これは前出し

た善磨の作品と同じく大正十二年の関東大震災を詠じたものである。大震災をうたった歌人はこの二人の他にも島木赤彦、中村憲吉、高田浪吉等数多くあるが、『鏡葉』には「震災の歌五十首があり、もっとも多く作をとどめた歌人に数えられている」（窪田章一郎、前掲書）。この歌は「丸の内」と題した二首中の一首。空穂の震災詠のはじめにある詞書によると、当時小石川雜司ヶ谷に住んでいた彼の家は九月一日の大震災には幸いにも被害を免かれたが、二日、震動のおとろえたのを幸いに、先ず神田猿樂町に古書店を営んでいた甥の家あとを見に赴いた、という。しかし、それから見聞したのは物凄しい災害の光景ばかりで、無惨な状況にきもを潰したのである。

⑤もその一つで、意味は明瞭であるが、まことに悲惨だ。私は今度の大战に中国大陸で捕虜となり、昭和二十一年復員の途中、旧満洲の曠野を徒歩で歩きつつ、子を失いその子を野に埋めて来た主婦たちと一緒に、悲痛なその体験談に胸うたれたが、⑤の歌を読むとそれを思い出す。このほか、空穂の震災歌の中で子供を詠じた

ものに「死ねる子を親の捨てたりみ瀆^ぼばた柳青くしてすずしきところ」「あふ向きて浮ぶは男うつ伏してしづむは女小さはその子か」「負へる子に水飲ませんとする女手のわななくにみなこぼしたり」等がある。⑥は歌集『青朽葉』（昭和4刊）所収。「越ヶ谷の町に行きて」と題した、街頭スケッチである。この頃の子供はバリカンで頭を刈らずに、カミソリで青坊主のように剃られる者が多かった。ところが兄の少年が遊んでいるため、弟が剃りかけのまま飛び出して来たのか、その珍妙な頭のままで、巷に兄と遊んでいるのである。二人の童児を描いてニーモア溢れる作品であろう。私なども子供の頃、剃られはしなかったが親にバリカンで頭を刈ってもらって、半刈りのまま飛び出した記憶があり、この⑥もまた郷愁をそそられる名作である。

（お茶の水女子大学）